

## 祐天寺の連結住棟

正会員 北 山 恒 君

東京の典型的な木造密集住宅地に建つ集合住宅であるが、これからの都市居住のあり方に大きなメッセージを発する作品である。祐天寺という庶民的な密集住宅地の中に建つ、敷地面積 1300m<sup>2</sup>、46 戸という比較的規模の大きな集合住宅である。しかし、全体として 9 つの住棟に分割され、開放性やボリュームの操作が綿密に行われているため、周囲の細街路からもその規模を感じさせない。さらに、敷地内には路地や中庭があたかも街区を構成するように組み込まれており、街路からの視線を通して周囲との一体感も感じさせる。

敷地の中央には開放的で大きな空間（CORE 棟）が 3 棟配置され、敷地境界部分には小さなボリュームのクローズな空間（ANNEX 棟）が 6 棟配置されており、これらがバルコニーで連結されている。各住戸はこのバルコニーを介してオープンとクローズのユニットが対比されるスプリットタイプとなっており、異質な空間が意図的に生活空間に持ち込まれるとともに、バルコニーの移動という振る舞いが自然に生じる。この構成により、住戸内の空間が実質以上に広く感じるということもメリットとしてあるようだ。

各棟の配置は周辺の路地や空隙を丁寧に読み取りながら、これに編みこむように配置されており、街区の空隙が住戸ユニットまで連続してつながるよう工夫されている。住居者や近隣からの視線も綿密にスタディされ、住棟や開口の配置が決定されている。その結果、他居住者や近隣の気配が各ユニットまで巧みに近づけられ、逆にそれぞれの生活の振る舞いが外部へ気配を漂わせるというような双方向の仕組みが成立している。このように、相互のプライバシーレベルをさげることで、互いへの気配りが生じるとともに、生活意識の開放という高揚感も生まれ、集まって暮らす楽しみをあたらしい形で実感できるものとなる。バルコニーに設置されたデザイン家具を街路から見受けた時に、生活者の感性が伝わってきて楽しい気分となったが、このような共有する場の感覚が都市居住に必要だと感じさせられた。

この作品を通じて、プライバシーとパブリックが対立関係にある密集地で、希薄化されつつある他者との距離感を再構築しようという設計者の強いメッセージを改めて感じた。この建物は当初賃貸集合住宅として計画されていたが、施主の交代により分譲住宅となった。設計者は居住者が生活空間を選択できることが、この集合住宅の魅力を一層引き立てるものと意図していただけないに、分譲の区分所有には不安を覚えたに違いない。しかし、その危惧を超えて居住者がこの集合住宅を自由に住みこなし、近隣との関係が再構築されるのであれば、それは想定以上の成果とみなせるのではないかと大いに期待する。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。